別子鉱山史の留意点－追加８

令和６年６月８日　坪井利一郎

山方･木方

明和６年調整の別子立川両御銅山図、明和６年の別子立川両御銅山図、天保１０年の別子山内図、天保１１年の別子御銅山絵図の中に「山方」「木方」が記載されている。

一般的には、山方は採掘関係者の集落で、木方は焼鉱関係者の集落と言われてきた。伊藤玉男は「明治の別子」で「方」は船方、土方、馬方などの広い意味での職種と述べている。そして山方を坑内労働者と解するのに若干の疑問を感じ＜鋪方、木方、吹方、炭方などもあり山方は山師方と解すべきと述べている。

日本語には欧印語にあるような複数体系が無いと言われている。「庭に木がある」と言うように。俳句を英語などに翻訳する時に、単数か複数かが障壁となる。しかし言葉の世界には、単数、双数、複数の表現がある。二つのと言うのが双数である。目、耳、手、足などの様に２つそろいの物である。相撲の取り組みでも東方・西方と呼ぶ。二つそろったものの一方、あるいは対の半分をさしているのが「片一方」である。両目に対する片目、双(雙)手に対する隻(せき)手。自然数は、１、２、３、４、５・・・・とある。１が単数で、２から３、４・・は複数である。２は対という枠では単数である。２を半分にして１、２に１を加えて３、さらに１を加えて４と、２から始まったのではないかとも考えられている。

旧別子の絵図に見るように、別子銅山で働く人たちが一組の社会をなし、採鉱する人たちと製錬をする人たちに分けたのが山方・木方である。山方の中を山先、山師、山方と再区分し、木方の中を木方、炭方、吹方と再区分したので後の人たちが混乱をきたした。

山方は旧別子の谷の上部にあり、木方は下部にある。坑口から搬出された銅鉱石が重力に従って下方に移動しつつ処理されて銅が取り出されて行っている。山方から木方への移動である。山方・木方の生産エリアは足谷川の左岸、居住区域は右岸とエリア分けされている

（参考文献：工藤進「日本語はどこから生まれたか」ベスト新書）

トラス橋の焼鉱窯群下の鍞

トラス橋の対岸に溶岩状の鍞がある。江戸時代の鍞と説明を受けてきた。明治３１年撮影の写真付きの説明板の「トラス橋の焼鉱窯群」の説明文には「カラミがあるということは、ここにも製錬所があったという何よりもの証である。写真では無数の焼窯が立ち並んでいるが、その前には溶鉱炉があったことになる。」とある。

ここに製錬所があったのは、川に鍞を捨てているので明治２８年より前である。江戸後期は裏門上流の下の床屋で製錬した。左岸には川に捨てた鍞が銅滴の様に一部残っている。明治１３年に高橋製錬所が稼働したが、明治２５年頃の再稼働まで和式製錬に戻しているのでその時の鍞ではないか。裏門を出ているので、下の床屋から高橋製錬所への移行期である。製錬工程で考えると東延から出た鉱石の製錬が考えられるが、史料には出てきていない。